

アイヌ口承文芸テキスト集4

白沢ナベ口述 ナナカマドのイナウで伝染病の神を倒した

採録・訳・註 中川裕

解説

今回紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、1988年6月20日、千歳市蘭越の故白沢ナベ氏の御自宅において、筆者が氏から録音したウエベケレ「散文説話」であり（整理番号：N8806202.UP）、2002年度千葉大学普遍教育科目「アイヌ語4」（中級後期）で教材として使ったものである。語りの白沢氏については、『ユーラシア言語文化論集』3号（2000）のアイヌ口承文芸テキスト集1「狼から逃れた娘」を参照していただきたい。このウエベケレは10分30秒ほどの比較的短いもので、父親の小山田サンレキテ氏からも、姉のアサ氏からも聞かされた話だということである。

あらすじ

私は裕福に暮している長者であり、妻も働き者で幸せに暮していた。ある年のこと、私たちの川の河口の方から、奥に生えているはずのハンノキの影が前に出て見え、川端に生えているはずのヤナギの影が奥の方に見えるという話が聞こえてきた。色々と考えてみて、それは伝染病の神のやってくる知らせに違いないと思い、山奥に逃げるように私は村人たちに命じた。

跡をつけられぬように、お互いが前に歩いた者の足跡の上を歩いて細い道になるように命じ、私が先頭に立って歩いて、深い山奥にたどりついた。そこでナナカマドでイナウの神と柵を作った。それを道をふさぐように立てて様子を見ることにし、みんなで野宿をしていると、夜中近くになって、川下の方から何やら上ってくる声がする。女がウポボを歌い、男や女が踊る声がにぎやかに聞こえてくるのだが、それが伝染病の神であることを察知した私は、こんな山奥まで追いかけてきたことに大変驚いた。

夜明け近くになって、その声の一団がナナカマドの柵のところまでやってくると、「これでは俺たちは生きて帰ることができない」と、泣きわめく声が聞こえたが、夜が白々と明けてくると、ふつりと聞こえなくなった。それでも、すぐに行ってみるのは恐ろしいので、もう少し様子を見る

ことにし、何日かそこで夜を過ごしたが、それきり何の声も聞こえてこない。ということは、ナナカマドのイナウ、ナナカマドの柵の匂いにやられて全滅したのだろうと考え、私たちは村に戻ることにした。

それからは、再び怪しげなことが起こることもなく、元通りの生活に戻り、私たちは男の子も女の子もたくさんもうけ、その子たちを可愛がって育てた。その子たちが大きくなると、女の子には妻が女の仕事を教え、男の子には私が男の仕事を教えた。みんな私以上に狩が上手になり、シカでもクマでもたくさん捕ってくるし、魚も大きなのばかりたくさんとってくるので、私たちは何不自由なく暮すことができた。

そのうちに私も年をとってきたが、村を守った私であるので、村人たちはクマを捕るといって、私を酒宴に招待してくれ、私たちの方もまた村人を招待し、幸せに暮した。何か不審なことがあったら、ナナカマドのイナウや枝を窓や戸口のところに挿して置くのだぞということを、子供たちにも村人たちにも言い聞かせて、私は天寿をまっとうしたのである。

解説

このウエベケレは、簡単に言うと、幸せに暮している長者がいて、ある時そこに異変が起こる。それを自分の知恵とカムイの力を借りることで見事に解決し、後は何事もなく幸せな一生を送り、その顛末を子孫に語り残してこの世を去るという内容で、これまでこの『ユーラシア言語文化論集』の中で紹介してきた白沢氏の伝承に比べると、非常にオーソドックスな、典型的なスタイルのウエベケレといってよい。そういう意味で、ウエベケレというものがどういうものかを知る導入のためのテキストとして、格好の話であろうと思われる。

そればかりでなく、この話には民族誌的にもアイヌの伝統的な世界観を知るためにも、面白い素材が色々とちりばめられている。

そのひとつは、伝染病に関する考え方と対処法である。この話に登場する apkas kamuy 「歩く神」というのは伝染病であり、その中でも江戸時代に猛威を振るって多くの人の命を奪った天然痘やインフルエンザがその代表的なものだと考えられる。伝染病の神は話によっては渡り鳥の姿となって飛んでくるのであるが、ここではおそらく人間と同じ姿をしており（実際には一度も姿を見せることはないのだが）、しかも子供まで引き連れた大集団でそろそろと人の跡をつけてくるのである。この人間の足跡をたどって、村から村を荒らしまわって歩くというイメージは、まさに apkas kamuy

の語源となるものであろう。

kikinni は一般にナナカマドのことも、エゾノウワミズザクラのことも指すようだが、この話に出てくる kikinni は、白沢氏の話を経合すればナナカマドのことだと思われる。ナナカマドが病魔除けに用いられることは、知里・植物編に、「エゾノウワミズザクラと同様に、その特有の臭気の故に除魔力を認められ、魔除けの呪法に、病魔の撃退に、ひろく用いられた」(p.129)とあることでも知られるが、それを kutek「柵」という形で、まるで車止めのようにして病魔を食い止めるという点だが、この物語の非常に面白いところである。kutek という単語はバチェラー辞書に A kind of fence made for the purpose of leading animals into snares. Also a snare to catch birds.(p.285) 「動物をわなに導くための一種の柵。また鳥を捕まえるわな」とあり、久保寺辞典にも「鹿をとるための柵」(p.149) とあるが、病魔を防ぎ止めるためのものとして kutek が作られるというような記述は、管見では他に見当たらず、極めて興味深い伝承例であるということがいえる。

白沢氏は自分で山奥からとってきたナナカマドを自分の庭に植え、その枝を玄関のドアの内側にいつも挿してあった。単なる言い伝えとして言葉で記憶しているだけのことではなく、この話は生活の中で生きたものとしての伝承を語った物語なのである。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_ (アンダーライン) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w_a → an ma. h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。また、<wa>のように<>でくくったものは、白沢氏の語り癖で次の語句を考えたときに直前の語の最終音節等を繰り返すことがよくあるが、その音を示すものである。...とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。その際、*aeoy ... などのように*を添えたものは、単語が言いさしになって、不完全な形で終わっていることを示す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それをしておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合にのみ、示してある。

原文テキストとその訳は、段落ごとに対応するように左右に並べて提示した。註は各ページごとに脚註の形で示した。脚註中、(N9102182.FN) 等と書かれたものは、その文章が含まれるデータファイルの資料整理番号を表す。

なお、註における引用文献は、以下のような略称で示した。

久保寺辞典：久保寺逸彦（1992）『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会

田村辞典：田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館

知里・植物編：知里真志保（1953）『分類アイヌ語辞典 植物篇』（著作集別巻1：平凡社）

方言辞典：服部四郎編（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店

民族誌：アイヌ文化保存対策協議会編（1970）『アイヌ民族誌』第一法規出版

本文

a=kor pet¹ ... pet ... sino nispa
 a=ne wa やっぱり kamuy ne yakka yuk ne
 yakka poronno rayke nispa a=ne. kotan
 kor kur ... kotan kor nispa a=ne wa
 an=an. pirka katkemat a=kor wa,
 arikiki katkemat ne kusu, toyta yakka
 tu pu epuni re pu epuni, <ni> mono
 sirka un siri ka isam no² nepki kusu
 cihoyupure. pirka katkemat nepki
 katkemat a=kor wa an=an ruwe ne.

asinuma ekimne=an kor tup sumawe
 a=eawnarura rep sumawe a=eawnarura.
 yuk ... yuk ne yakka rupne yuk patek
 a=eawnarura. kamuy ne yakka piye kamuy
 patek rupne kamuy patek a=eawnarura p
 ne kusu, cepkoyki=an y_akka pirka cep
 patek poronno a=yanke wa, <wa>

私たちの川・・・私は本当の長者であり、
 やっぱり、クマでもシカでもたくさん捕っ
 てくる長者であった。私は村主・・・村長
 であった。美しい奥さんがいて、働き者の
 奥さんだったので、畑仕事をして、ふた
 つの倉みつつの倉を建てるくらい収穫する。
 何もしないで座っているということなく、
 忙しく働き回る。そんな良い奥さん、働き
 者の婦人を私は妻にして暮らしていた。

私のほうは、山へ行くと二頭の獲物を家
 に運び、三頭の獲物を家に運ぶ。シカを捕
 っても、大きなシカばかり捕ってくる。ク
 マを捕っても肥え太ったクマばかり、大き
 なクマばかり捕ってくるので、魚捕りをし
 ても、良い魚ばかりたくさん揚げて、

¹ a=kor pet : この言葉で始まっているのは、後の方で出てくる「私たちの川の河口からハンノキの影が...」という部分から語り出そうとしたものと思われる。しかし、uepeker の語り出しの原則は、まず主人公（叙述者）の人物像を述べるということなので、sino nispa a=ne wa と語り直したのであろう。

² mono sirka un siri ka isam no : 働き者の女性であることを示す常套句。mono「静かに」sirka「地面の上」un「一につく、はまる」siri「様子」ka「も」isam「ない」no「で」。

a=e kasma hike cise or_ ta ne yakka³,
cep kuma tay kam kuma tay orasnacitke.
<ke> piye uske osumtapes wa ...
osumtapes kane kor oka=an ruwe ene an
h_i ne awa <wa>

sineanpane ene hawas h_i ene an
h_i.

"a=kor pet pet putu wano, kene
kurihi hosaociwe susu kurihi
homakociwe⁴ kane <ne> sirki ruwe ne."
sekor kane hawas ruwe ne wa,
yaykouepeker⁵=an w_a inu=an h_ike,
apkas kamuy⁶ payeka wa, neno inkar
utar oka hawe ne kuni a=ramu wa, orowa
a=kotanu un utar opitta a=kimatekka
hine a=siren hine, <ne> toop kim ta
paye=an hine

食べきれない分は家の中にでも、魚の干し竿、
肉の干し竿にずらずらと掛け並べた。脂の乗
ったところは油がぼたぼた垂れながら暮らし
ていたのだが、

ある年のこと、こんな噂が聞こえて来た。

「私たちの川の河口から、ハンノキの影が前
に見え、ヤナギの影が後ろに見えている様子
だ」などという話なので、つらつら考えてみ
ると、流行病の神様が歩き回っているので、
そんなふうに見える人たちがいるという話だ
な、と思い当たったので、そこで村人たちみ
んなをせきたてて、一緒に山奥へと向かうこ
とにした。

³ cise or_ ta ne yakka : 家の中にも魚の干し竿、肉の干し竿が並んでいるというのは、やは
り変なので、掛け竿はやはり外に並んでいるのであり、家の中では炉の上にも魚や肉が下がって
いてという描写を、おもいきり省略して言っているのだと考えられる。註22参照。

⁴ kene kurihi hosaociwe susu kurihi homakociwe : 何か異常事態が起こっていること
を表す際の常套句。hosaociwe は「尻が前の方を刺す」ということで、この場合
は影が川端の方に近寄って見えること、homakociwe は「尻が奥の方を刺す」とい
うことでその逆を表している。susu 「ヤナギ」は通常川端に生えているが、kene
「ハンノキ」はもっと奥に生えているものなので、通常とは逆の見え方になって
いるということである。

⁵ yaykouepeker : この動詞は、久保寺辞典では「心配する、気にする」となっており、
田村辞典には「困っていろいろと考える」とあるが、この状況にはどちらの
訳も合わない。むしろ字義通り、「自分に対してウエベケレをした」と解したほう
が理解しやすい。すなわち、故事言い伝えを紐解いて、かつてこのような事例が
あったかについて、思いを巡らしたということであろう。

⁶ apkas kamuy : 流行病の神のこと。字義通りには「歩く神」。白沢氏は同じ意味
で pakor kamuy と呼ぶ。

"apkas=an usi ukototerke⁷ だか⁸
ane ru ne an kuni ne <ne> oyakoterke
iteki ki yan. hoski arpa kur arpa ...
arpa ruwehe a=opes wa a=oterke p ne
na." って itak=an kor, hoski hoski
arpa=an ayne toop kim ta paye=an hine
orowa <wa>

"tane te pakno arki=an ruwe ne
yakun, kikin⁹ inaw a=kar wa
kikin⁹ ... kikin⁹ kutek¹⁰ a=kar wa
orowa ene ka ne hi a=nu yak pirka."
sekor kane itak=an kor kikin⁹ inaw
a=kar. kikin⁹ kutek a=kar hine, <ne>
orowa imakaketa <ta> a=inne-topaha
rewsi hine oka=an akusu, <su>

「私が歩いたところの足跡ををお互い踏み
つけて、というか、細い道になるようにして、
他のところを決して踏みつけるなよ。先に行
った者の行った足跡をたどって踏んで行くの
だぞ」と言いながら、私は先に先に行って、
遠い山奥に向かって行った。

「ここまで来たのなら、ナナカマドのイナウ
を作って、ナナカマドの柵を作って、それで
どうなるか見てみよう」と言って、ナナカマ
ドのイナウを作り、ナナカマドの柵を作って、
その後、私たちは大勢で一団となってそこで
一夜を過ごしていると、

⁷ ukototerke : u-「互いの」kot「(足)跡」oterke「~を踏みつける」。もちろん、
地面に残して行く足跡をできるだけ小さなものにして、病魔が追いかけてこない
ようにしようという工夫である。民族誌の「病魔の追跡をさけるために、藁束で
自分の足跡を消しながら逃げたという」(p.483)という記述と符合する場面であ
る。

⁸ 「だか」は日本語だが、白沢氏に限らず、よくアイヌ語の文の中に挟まれることがある。大概是、
言った瞬間に、自分の言った言葉があまり適切ではなくもっとよい言い方があると感じた時に使わ
れるようである。

⁹ kikin⁹ : 多くの地域ではエゾノウワミズザクラとナナカマドを同じく kikin⁹
と呼んでいるようである。白沢氏も iwa kikin⁹「山のキキンニ」と呼ばれるもの
はナナカマドであり、これは山奥にしか生えておらず、もっと近くに生えている
のを cikappo kikin⁹「小鳥のキキンニ」と呼ぶとしている (N9102182.FN)。本編
ではただ kikin⁹としか言っていないが、山奥に生えている kikin⁹だということ
なので、ナナカマドと訳している。

¹⁰ kutek : 「柵」と言っても、股木を二本立ててその上に一本の棒を竿のように掛
け渡したもので、kuma「掛け竿」と同じ形状のものである。それを工事中の標識
のように道をふさぐようにして立てる。その際「ちよいちよいちよいと傷つける」
(N8806201.FN) と言うので、eraperoskiのような切れ込みをいれたものらしい。
民族誌 633 ページには、イヌエンジュの枝を病魔除けにする際に、「二段か三段
に上向きに三個の切り花をつける」とある。

siannoski turpaki¹¹ ta, i=os wa
paye hawe as. menoko upopo¹² haw,
menoko horippa haw, okkayo horippa
haw ororoyse¹³ kane wa ... kor uminare
wa mina rok mina rok kor paye hawe a=nu
ruwe ne wa, wen iokunure toy iokunure
earikinne ekimne no, <no> i=kesanpa p
ne hawe a=okunure kor oka=an akusu

*siran ... ankes tukarike ta inaw
a=kar kutek a=kar usi ta arki wa,
orowano ukokimatek hawe ene an h_i.

"tane anakne <ne> siknu=an w_a
hosippa kuni p a=ne ruwe ka somo ne
noyne siran. kikinni-kutek-kar=an
w_a an. kikinni inaw kamuy¹⁴ a=kar wa
an ruwe ne yakun, siknu wa hosippa
eaykap kuni p a=ne ruwe ne."

真夜中になろうとする頃、後ろから何ものか
がやってくる声がする。女のウポポを歌う声、
女の踊る声、男の踊る声がにぎやかに、笑い
あいながらやってくる声が聞こえてきたので、
えらく驚いた。こんな山奥にまで私たちを追
いかけて来たらしいことに、驚いていると、

夜明け近くになって、私たちがイナウを作
ったところ、柵を作ったところにやってきた。
すると、あわてふためきあう声が聞こえて来
た。

「おれたちはもう、生きて戻ることはできな
いようだ。ナナカマドの柵が作られ、ナカカ
マドのイナウの神が作られているのなら、お
れたちは生きて戻ることはできないぞ」

¹¹ turpaki: この単語の意味はあまり判然としないが、久保寺辞典によると、「匹敵する、及ぶ」とある。そこから類推して訳をつけた。白沢氏はただ「真夜中」と説明している。

¹² upopo: 複数の歌い手によって歌われる短い歌。地域によっては斉唱で歌われるところもあるが、千歳ではおもに輪唱で歌われる。

¹³ ororoyse: 白沢氏の説明では、やかましいぐらいに騒ぐことを言うという。

¹⁴ kikinni inaw kamuy: 前に出てきた文では kikinni inaw となっているが、ここで普通の inaw ではなく、それ自身が魂を持った kamuy であることが明らかにされる。タラノキやエンジュなどの特別な形状や匂いを持った木は、消し炭や石などを心臓として結びつけられることで kamuy となる。N.G.マンローはこういったものを shutu inau kamui と総称している(N.G.Munro, 1962, *Ainu Creed and Cult*", p.47)。

sekor haweoka kor, <kor>
 ukokimatek ukoparaparak. okkayo ne
 hike menoko ne hike hekattar¹⁵ or
 unno ukoparaparak kor oro ta oka
 ruwe ene an h_i ne akusu, <su> tane
 nisat or peker kane siran akusu,
 eirpak no¹⁶ hawehe tuy¹⁷ wa oar isam
 ruwe ene an h_i ne hine, <ne> orowa
 ruwe ne korka eytasa nisap inaw or_
 ta kutek or_ ta paye ka a=sitoma
 kusu,

"rewsi oro ta na sine ancikar tu
 ancikar_ rewsian w_a inu=an ro¹⁸."
 sekor kane itak=an hine, rewsian wa
 oka=an ruwe ene an h_i ne akusu, <su>
 isimne ka nep haw ka isam. orowa na
 isimne ka nep haw ka isam.

と言いながら、あわてふためき、泣き叫び
 あう。男も女も、子供たちにいたるまで、泣
 き叫びあいながらそこにいたが、夜が白々と
 明けてくると同時に、その声はふつとりと聞
 こえなくなってしまった。しかし、あまり急
 いでイナウのところ、柵のところに行くのも
 恐ろしいので、

「野宿したところに、もうひと晩ふた晩泊ま
 ってみよう」と言って、もう一夜明かしてみ
 たところ、翌日になっても何の声もしない。
 その翌日になっても何の声もしない。

¹⁵ 伝染病の神あるいは疱瘡神は物語によって様々な形態をとって現れる。霰の模様の入った小袖を着たり、鳥の群れになって飛んで来たり、弁財船に大勢で乗って攻めてきたりなどの描写がよく知られているが、本編のように子供連れでやってくるという話は珍しいであろう。

¹⁶ eirpak no: 久保寺辞典に「eir-pakno 一緒に、それと共に、同時に」とある。

¹⁷ tuy: 「止む、終わる」という意味であり、apto tuy 「雨が止む」などの用法もあるが、「切れる」という意味から「切れて落ちる」、「落ちてお終いになる」という順序で発展して来たのだろうと考えられ、原義の「切れる」という意味合いが、この「止む」という用法にも多少反映されていると思われる。それを「ふつとり」という訳語で表してみた。

¹⁸ wainu=an ro: 日本語の訳としては「～してみよう」となるが、アイヌ語原文としては「～して聞こう」となる。アイヌ語では視覚的な情報とそれ以外の感覚による情報を nukar/inkar と nu/inu で区別して表現する。「～してみる」にあたる表現の場合も同じで、視覚以外の情報をたよりにトライする場合には、wa inu を用いる。

tutko rerko rewsian ruwe ne a
 korka, <ka> ne i=kesanpa wa arki p
 hawehe isam ruwe ne wa kusu, tane <ne>
 opitta kikinni kamuy kikinni kutek
 huraha にかって, huraha ekot¹⁹ wa
 isam ruwe ne wa hawehe ka isam ruwe
 ne kusu

"tane hosippa=an y_akka pirka
 ruwe ne na."

sekor a=utarihi a=pawetenke²⁰
 hine, orowano hosippa=an wa a=kotanu
 ta hosippa=an ruwe ne korka, orowano
 nep a=oyamokte ka somo ki no²¹, suy
 ekimne=an kor kamuy cikoykip yuk
 cikoykip, cep ne yakka poronno
 a=yaokuta wa a=e kor, a=macihi toyta
 kor tu pu epuni re pu epuni.

二、三日泊ってみたが、その私たちを追
 いかけてきた者たちの声がしなかったので、
 もはやみんなナナカマドの神様、ナナカマド
 の柵の匂いにやられて、匂いで死んでしまっ
 たので、声も聞こえてこないのだから、

「もう、戻ってもよいぞ」

と、私は村人たちに命じて村に戻って来た
 が、それからは何も不審に思うようなことも
 おこらず、また山へ行くと、クマだのシカだ
 の（捕って来て）、魚もたくさん岸に揚げて食
 べながら、妻も畑仕事をするふたつの倉み
 っつの倉を立てるほど収穫を上げる。

¹⁹ huraha ekot: kamuy というものは、善神にせよ悪神にせよ、匂いに敏感であり、
 嫌な匂いというものに非常に弱いことになっている。そのため、病魔払いにはギ
 ョウジャンニクやコブシなど匂いのするものが用いられる。ナナカマドなど、
 我々が嗅ぐかぎり、さほど強烈な匂いのものとも、嫌な匂いのものとも思えない
 のだが、それでも kamuy にとっては致命的なのである。病魔払いをする時や、魔
 物を退治してその肉を細かく刻んでまき散らすなどの際に、便所の前で行うこと
 が多いのも、悪臭を放つ便所というものに、魔を払い魔を押さえ込む強大な力が
 あるとみなすためである。

²⁰ a=pawetenke : pawentenke のように聞こえるが、白沢氏に再確認したところで
 は、pawetenke だということであった (N8806201.FN)。

²¹ nep a=oyamokte ka somo ki no : 「何も不審に思わないで」というのは、本編冒
 頭の、ハンノキの影とヤナギの影が入れ替わるような異常現象が起きることもな
 く、という意味だと考えられる。

asinuma ekimne=an kor kamuy ne
yakka yuk ne yakka a=rura wa, <wa>
cise or_ ta ne yakka soy ta ne yakka²²,
a=e kasma p osumtapes kor racitke wa
oka=an ruwe ene an h_i ne.

a=macihi toyta kor tu pu epuni re
pu epuni. nep a=e rusuy nep a=kor_
rusuy ka somo ki no <no>, a=macihi
okkayo po ka kor, menoko po ka kor
wa, orowano a=pirka-reska
a=tomte-reska²³. a=ipennurepa²⁴ kor
a=kor ruwe ene an h_i ne akusu, tane
anakne okkayo po ka rupne, menoko po
ka rupne wa, menoko ne hike unuhu
kasuy. ene menoko monrayke oka hi
unuhu or wa a=epakasnu.

私のほうも山へ行くと、クマでもシカでも
捕って来て、家の中にも外にも、食べきれな
いものが油をしたたらせてお下がり下がつている。
そんなふうに暮らしていた。

妻は畑仕事をするのと二つの倉三つの倉を立
てるほど収穫を上げ、何を食いたいとも何を
欲しいとも思わずにいて、妻は男の子ももう
け、女の子ももうけ、その子たちを大事に育
て、立派に育てて、可愛がって暮らしている
うち、もう男の子も大きくなり、女の子も大
きくなった。女の子の方は母親を手伝い、女
の子の仕事の仕方を母親から教わった。

²² cise or_ ta ne yakka soy ta ne yakka: 註3では cise or_ ta ne yakka「家の中でも」としか言っていなかったが、本来、このような対句で表現するはずのところである。

²³ a=pirka-reska a=tomte-reska: 方言辞典によると「育てる」を表す resu と reska は、前者が八雲・幌別・沙流・帯広、後者が美幌・旭川・名寄・宗谷ときれいに分布が分かれているが、白沢氏はその両方を同じように使い、pirka-resu tomte-resu という表現も用いる。千歳方言は沙流方言と非常に近いが、旭川など道央の方言と共通する側面も見せる。この単語もそのひとつである。

²⁴ ipennurepa: この単語の意味は不明である。この部分について白沢氏に尋ねたところ、本当は kotonna wa a=ecoknure setunna wa a=ecoknure「前からほっぺたにキスしたり、背中から頭にキスしたり（して可愛がる）」ということを使うはずのところだという説明であった。

okkayo ne hike okkayo monrayke ene
oka hi asinuma yaykata a=epakasnu kor
ki p ne kusu, ekimne ne yakka easkay.
i=akkari ka ekimne ka easkay wa,
poronno kamuy ka rura yuk ka rura.
cepkyokipa kor poronno cep ka poronno
rupne cep patek eawnarura wa, nep a=e
rusuy nep a=kor_ rusuy ka somo ki no
oka=an.

orowano anakne <ne> nep
a=oyamokte ka somo ki no oka nispa²⁵,
oka katkemat a=ne ruwe ne hine <ne>,

tapne kane okay pe payeka kor
kikinni inaw a=kar wa, puyar or_ ta
ka apa or_ ta ka a=roski p ne. kikinni
<ni> nitek puyar or_ ta ka apa or ka
a=eusi wa okay=an kor pirka p ne na²⁶.”

男の子の方は、男の仕事の仕方を私が自分
で教えたので、山での狩もできるようになっ
た。私以上に狩も上手になり、クマもシカも
たくさん捕ってくる。魚捕りをして、魚も
たくさん、大きな魚ばかりたくさん捕って来
て、何を食いたいとも何を欲しいとも思わず
に暮らしていた。

それからというものは、何も不審に思うよ
うなことは起きず、私たちは（幸せに）暮す
長者と、奥さんになった。

「これこれこういうものがうろつきまわった
時には、ナナカマドのイナウを作って、窓の
ところにも、戸口のところにも立てるものだ
ぞ。ナナカマドの枝を窓のところにも、戸口
のところにも立てておくとよいのだぞ」

²⁵ nep a=oyamokte ka somo ki no oka nispa: 直訳すると「何も私たちは不審に思わ
ないで暮す長者」ということになるが、oyamokte「不審に思う」の主語が四人称
であるのに、oka「暮す」の主語は三人称である。このように接続助詞（この場
合は no）の前後で人称が変わる文は、アイヌ語では珍しくないが、日本語には訳
しにくい。

²⁶ 白沢氏の家には、氏が支笏湖の近くまで行って苗を取ってきたというナナカマドの木が植えてあ
り、その枝が実際に玄関のドアのところにも挿してあった。

sekor an pe a=po-utari a=epakasnu
 kor an=an ayne <ne>, asinuma ka onne
 kur a=ne kusu kema pase kur a=ne kusu,
 a=poho-utari itasa i=paroyki
 i=kaoyki kor nep a=e rusuy nep a=kor_
 rusuy ka somo ki no, <no> an
 kotankorkur a=ne.

yaykotan ka epunkine <ne> ...
 yaykotan ka epunkine nispa a=ne kusu,
 a=kotanu un utar ne yakka <ka> "a=kor
 nispa a=kor ottena²⁷." sekor haweoka
 kor, kamuy ronnu kor i=tak ka ki a=tak
 ka ki²⁸. utaspa a=ki wa oka=an nispa
 a=ne wa oka=an ayne <ne>, tane onne
 nispa a=ne kusu, onne=an ruwe ne kusu,
 a=eysoytak hawe ne na.

ということ、子供たちに教えて暮らして
 いるうちに、私も年を取って足が重くなった
 ので、子供たちに逆に養ってもらい、世話を
 してもらいながら、何を食いたいとも、何を
 欲しいとも思わずに暮らす、村長であった。

私は自分の村を守った長者であるので、村
 人たちも「長者様、オッテナ様」と言って、
 クマを捕るといって私を招き、(私たちが捕
 ると) 私たちの方でも招き、お互いにそんな
 ふうにして暮らしているうちに、私もはや
 年を取ったので、こういう話をし残しておく
 のだ。

²⁷ ottena : オッテナという言葉は、江戸時代、アイヌの有力者にアイヌ村落をとりまとめさせるために、和人が任命した乙名という役職名が、アイヌ語に入ったものと考えられているが、沙流地方で私が収録した uepeker の中では、そういう意味で使われていると思われる例が少ない。多くの場合は、交易の場などで単に和人がアイヌの成人男性に呼びかけるための呼称として使われている。一方、白沢氏の uepeker では、本編のように、もともとの乙名の意味に近い特別な存在として、ottena という語を使っていると思われる例が多い。

²⁸ i=tak ka ki a=tak ka ki : かつては、大きな儀礼を執り行う際、必ず主賓となる人物を招いて一番の上座に座らせ、一番の土産を持たせることになっていた。そして当然のことながら、そういう席に主賓として招かれることは大変名誉なことであった。そうした習慣は儀礼を通じて人的なつながりを深めるために、重要なことであったのだろう。

tane oka kur ne yakka, nep ka
oyamokte yakun, kikinni inaw ka kar,
kikinni nitek ka kekke wa puyar ka
eusi apa ka eusi kor, pirka p ne ruwe
ne na. sekor an pe kotan or un utar
ka a=ekaspaotte kor, onne nispa a=ne
ruwe ne a kusu a=eysoytak ...
a=eysoytak kor onne=an ruwe ne na.

今いる者たちも、何か不審なことが起こっ
たなら、ナナカマドのイナウを作り、ナナカ
マドの枝を折って、窓に刺し、戸口に刺して
おきなさい。ということを村の者たちにも言
いつけながら、年を取った長者であったので、
私はこの話をして天寿をまっとうするのだ。

(なかがわ ひろし・千葉大学教授)